

## 『真宗大谷派の革新運動』

——白川党・井上豊忠のライフヒストリー』

森岡 清美 著

一八九六（明治二十九）年十月、教団の現状を憂い、その前途に危機感を抱いた六人——清沢満之・稻葉昌丸・井上豊忠・今川覚神・清川円誠・月見覚了——が、革新運動を決起した。彼らは拠点を洛外白川村にかまえたため、いつの頃からか「白川党」と呼ばれるようになつた。

本書は、従来はその「総帥」たる清沢満之を中心と描かれてきた白川党の革新運動を、「軍師・井上豊忠」という新たな入射角より再考することを企図した壮大な物語である。これまでの大谷派近代史が、「清沢中心史観」とも呼ぶべき視座より編まれることが多かつただけに、本書によって白川党運動という一事件のみならず、宗門近代史全体を見直す可能性が開示されたと言えよう。

著者の森岡清美氏は、日本の家族社会学の土台を構築した大家である。真宗教団を対象とした代表作として、五十年前に上梓された『真宗教団と「家」制度』

（創文社、一九六二年）が挙げられるが、このたび齡九十五歳を超えて五〇〇頁に迫る大著を世に送り出した事態については、自ら「奇跡が連続して起きた結果」（あとがき）と称している。人生のみちづれ（コンボイ）としての白川党六人衆のライフヒストリーに着目し、その関連資料を模索していたところ、偶然にも井上の自坊・法讀寺（山形県）に眠つていた、日誌をはじめとする大量の遺文と遭遇したというのである。

第一次資料の井上日誌から紡ぎ出された基本線を、当時の雑誌・新聞や、清沢の書簡・日記等によって補いながら編まれた本文は、あたかも同時代の空気を呼吸しているかのような語り口で（時に自らも白川党の「熟議」に参加しているかのようなコメントも見られる）、読む者を惹きつけるばかりでなく、厳しい問いをも突きつける。本書から得られる数々の視点・知見のなかで、とりわけ重要なのは、日誌を切り口とした研究の意義と可能性である。すなわち森岡氏は、日誌や書簡のような個人的記録の資料的価値はこれまで歴史家の認めるところではなかつたと指摘しつつも、井上日誌などの記録は

「個々人のライフヒストリーだけでなく、集合ライフヒストリー collective life history とでも呼ぶべきものを映し出している」（五頁）と声明する。そして「井上個人のライフヒストリーと併せて、彼と清沢を焦点とする橿円のなかに同志を定位して、白川党同志の集合ライフヒストリーを明らかにしたい。」（中略）それは、コンボイのなかでの相互作用による人格発達の軌跡をも探ることを可能にするだろう」（同）というのである。その可能性は、井上や清沢と同時代を生き、大谷大学長・大谷派宗務総長等を歴任した閻根仁応の日誌（教学研究所編『閻根仁応日誌』全八巻、二〇〇六～一〇一六年）など照らし合わせることでさらに広がり、より重層的な「集合ライフヒストリー」を紡ぎ出すことにもつながるであろう。

加えてもう一点、本書の論点のなかで筆者が着目したのは、革新同志たちが闘うべき「眞の相手」と指摘され、「諸悪の根源」とまで言われる「法主崇拜」をめぐる問題である。森岡氏は井上日誌中に記された「金箔」という語を駆使しつつ、白川党の同志たちは「法主が目に余る不行跡をしていても法主自身を攻撃しない、すな

（吉川弘文館、二〇一六年十月、一三、〇〇〇円+税）

（名和達宣）